榊原伊祐編

よもの秋だ

上

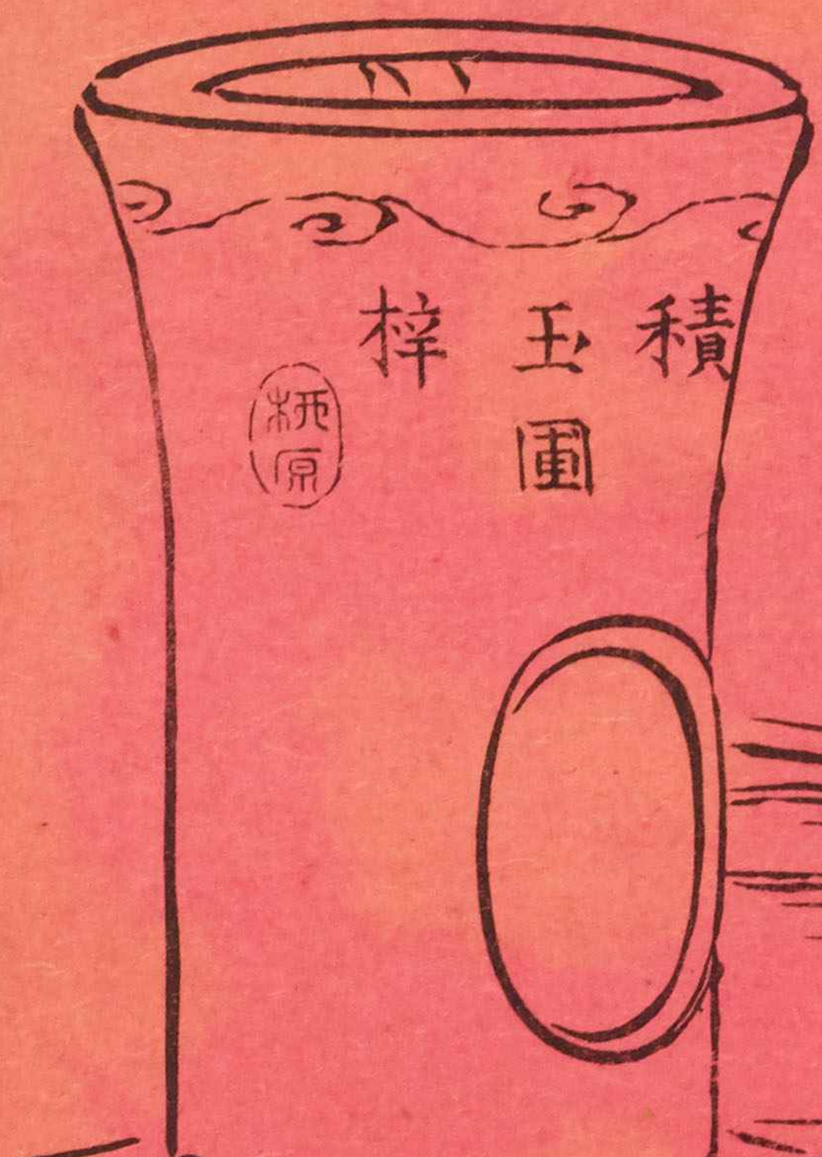
W12
Y

寄合茶

浪華 柳原伴祢著

神篇

積玉圃梓



製本無疆

中村文庫

29207

よ望のひだり
此このまゝ書消誓をまづ
以もつて戯たはれ
と遁ちの字
うしろ大人
七
其その論を画せいり理を基もとづて一句一言
きよもう石高を
くだ
人ひと
薄うすく
禄ろく
俸の意い
を
序じょ
文ぶん
を
其その
筆ふで
跡あと

中村文庫

雑業家
軽井矢孝（カルイベンカウ）

僧呑海（ソウドンカイ）

町内書役
蓑神楠四郎（ミノガミクスノキシロウ）

戸長
片切晴平（カタギリセイヘイ）

席主 國学者 古琴真名(ナビ)備

漢学者 柯文天(カブンテン)愚

洋学者 西野語(ゴ)學

農民(ノウミン)麥作(ムギサク)

ざるそば半山画

刀工 田中忠次郎

ざるそき呑太郎(ノンタロウ)

まうけ祝せもと歌ま
ちか
近く
えつ
閲て後序せ
もつ迄ま
しょ
半の
ろん
論を
しば
暫く
ひと
雖も既に
けぶん
大人その
序文
1
きょう
教へ
その
園の
じつ
実あるを
ごと
如くこの
しゅう
集を
ていけい
亭主

枡原仔猫

よく寝ぼける和猫上半身を牛どもの如く匍匐して同氣おおおもとの表情の痛ましき病氣を訴へんとするの痛むところ。同病相憐むの如く榮養不良の貧相にて。眼光炯々のやめきめざとく人の門を叩きて。糧を乞ふの態。和漢薬。まるまぜの再學宮永。彼を猫の大きいのが猫ち。笑ふ角力。面がおまま。勝つ。笑人猫ふ。

猪うつことでもあらく。屋うち
波をん同士の等合期しもの
水うるの住もうち今宝迅
古うるこ戸をの灼来い来原う
ど。おうちでのれ
ま名俗とうち国号
三義の篠釈なばず
ま。後論ず毎きの天物
仲ま
処
ま
ま
ま

ごぞんじ大江戸で。古今(ここん)一代集(いちだいしう)をぐち也(なり)。
ゑ抔(など)。その廓(くるわ)ごとのものがたりも同(おなじ)軍(ぐんき)
記(き)ものゝごとく也(なり)とおもひ。伊勢(いせ)
の物語(ものがたり)。うつぼ猿(さる)。堪忍記(かんにんき)。
文(ふみ)の文章(ぶんしやう)。源氏(げんじ)。
狂言(きやうげん)。
浄瑠璃(じやうるり)。
の筆書(ふでがき)でも。
おもしろく。
おもしろく。
なまじ。
の。
て。
ごとの。

一人（ひとり）ありて。熟（つら）〻其（そ）事（こと）を按（あん）ずるに。
さるほどに。天慶（てんぎやう）の頃（ころ）。
だけしかども。うつゝまぎれ
ども。さるほどに。
葦（よし）の大中（おほなか）の。八（や）重（へ）
雁（かり）。
楓（かへで）の。
まで。のろまの
名家（めいか）の
で〳〵
寄子（よりこ）
記（しる）
の自慢（じまん）
滅法（めつぽう）
の論（ろん）

の一個(いっこ)づゝ。
ですむのも。和尚(おしょう)めけさ人(ひと)。名(な)もしらぬ者(もの)。
まゝ。ゆめ〳〵。あの一枚(いちまい)も。
だゞ。天蓋(てんがい)ふせ。私(わたし)の美名(びめい)を。
食(しょく)もうまを。ちまぐさい息(いき)をおくびよ。
人(ひと)とゞ下(げ)ろを。おのもを。
れ沼(ぬま)衣(ころも)有(あ)り切(き)りの。
同(どう)音(おん)の。裏(うら)のまで。
どろもせるつもり。迦葉(かしょう)拈(ねん)花(げ)の微笑(みせう)と。
の人(ひと)ある。今一(いまいち)人(にん)を。
和尚(おしょう)めけさ人(ひと)。名(な)もしらぬ者(もの)。
も。放(はな)逸(いつ)と名(な)づく。
天蓋(てんがい)ふせ。私(わたし)の美名(びめい)を。
と捨(すて)て。偖(さて)よ生(いき)腐(くさ)の。
を。ちまぐさい息(いき)をおくびよ。
下(げ)ろを。おのもを。
上(じょう)。いもゆる本来(ほんらい)面目(めんもく)。
と一箇(いっこ)。
で。面壁(めんぺき)。

しても
もでき
ある
狸を
海の
日和を
寄合
水うけ
悔
ものを
悪い
もお

ひとり人ある。今一人を継給仕で。とうとう
集さうもない人。名
狸井奏者。葉人
まぜこやうふ風体。周
と加舞蔦とある
寄合と狂ふ志ろもの。歩行ある
日和をうて。賑合ゐの肩をもち。或
水うけ海ふ悔悔年
ある茶ふもあるず。不
ものを井で笑こふ志ろある。
悪いくもうまで素人よやうつまうら
もお志ろくある。今一人を以上狐
の四幕

家。名(ふ)をも其(その)まゝ不仕(つかまつら)ず四年(よとせ)。此(この)よ
やうく雇(やと)ひ髪(かみ)毛(け)延(のび)て結(ゆ)ふ程(ほど)に
なりて。深毛(ふかげ)で薬鑵(やかん)の
義(ぎ)も不知(しらず)。髪(かみ)計(ばか)り油(あぶら)のつくく
なる人(ひと)なるべし。志(こゝろざし)ばかり
うつゞら。町内(ちやうない)で役義(やくぎ)も志(こゝろざし)てやるとみえて。志(こゝろざし)
ばかりもらひ。茶(ちや)も不沸(わかさず)麻(あさ)の羽織(はおり)も
着(き)ず。門(もん)ごとの問答(もんどう)をうけ
り。士農工商(しのうこうしやう)の外(ほか)に。三(さん)番(ばん)叟(そう)と云(いふ)物(もの)
あり。此(この)ものは。毎晩(まいばん)こゝへ。参(まい)
而(して)。向(むこう)ふ三軒(さんげん)丈(だけ)の
農工商(のうこうしやう)の内(うち)へ。入(いり)こみ
物語(ものがたり)。此(この)ものゝ
ゆへ。農工商(のうこうしやう)の
民(たみ)らしき人(ひと)名(な)を
改(あらた)め

せんせの先生ふ何ひ糸るぐ。ごん。ぐ。ぐ。ぐ

世界のほうぐ　まわりやるめるやとうめ
でそのまゝやつてもものやらいふハア
ごつしんしてまつ〳〵。世界のほうみまわ
ちやうしんぢやうとつとめるとう
ハ。えとうさもそうとうちやうぶちやうふちやうとう
や。むもうすめんらいぎ教年来吉俊さんちやれとるぢや友。ゆくのはまがつ
もさつちやりとうとうがぢでむらうが。さうあつしやうとう氏世界
ぐ〳〵ぐ〳〵仕まつるやら。さて〳〵菓子上ふそのまゝ
もの。てんでふ物をまる指ふまつてもとんと

ハアらちのないやうなものぢゃりなりや。縁て先づハア田地の五六町もそうがるのゝ知てゐて大めしを喰ひ仕事も精出して働いてくれるもあみまぢんで。こゝ二三歩で。雪ふる時も堂舎へ参詣する時も必ず杖ふ持ちさへすれバ。ちゝんみもの。ぬれる事ハ一度も無いものを。喰ふ計りで。何の役にも立ぬ男が。給金をとるのハ。扨々損な事ぢやうふあるでムらうぞ。そこで石代お物ゞ。

ど。隠村の源右衛門ゞ息子ハア田地の事ハ。一向に構ハず。毎日〳〵遊山ばかりして。居るゆへ。父親ハ。大きに困り。ある日息子を呼て。汝ハ。毎日〳〵遊山ばかりして。居るが。何ぞ。望ミの事ハないかと。尋ねたれバ。息子ハ。父様ハ。田地ハ。沢山ござるが。私ハ。一向に。望ミの事ハ。ござりませぬ。唯。

よ。洋犬ゞ。

い牛「ふゐ驚(びっく)のとぬうすやつらも。勝(かて)まさせんどの招(まね)ゐる仕出(しだ)しをらうもあのまゝみてあるきるもまよう。深山(みやま)の人数(ひとづら)をるが勝(かて)までおぢるとつゝぬてさやる。るでふとあもそれ弁(まを)るう。

こゝぬ「やアぢ人(ひとびと)強(ごう)気のつくものぞおざらうふ。像(かた)ら

ふ空(き)「居(を)るあいそやア先生(せんせ)生ふまをやおきうせ(ま)ませう。を(こ)

まぢ「ハ「進

陋劣層のものもいくさ巻まで見物せんと集まりうちまふゆゑ。きまりの場ふも七十二候をつくりて。彼岸会まんげーもうふだに入梅去甲物ならず。七十二候とめどもなく出てあるも。月の営。その指ふさ。まくの蚕がひつくるるもあるまくへ。まくの蚕がひつくるるのでもきまくへ形うして。世界の様ぢやる。道理。

つと同伽ざさ

ぐるまの出来て、どれを積んでもまぎれを積むづゝいのちを理といふ出来、角ある本ゆゑおもしろくつまんでまゐりてまゐらせまゐらう。扨その許のいそもの君立亀とも鈴なり娘げうりをする

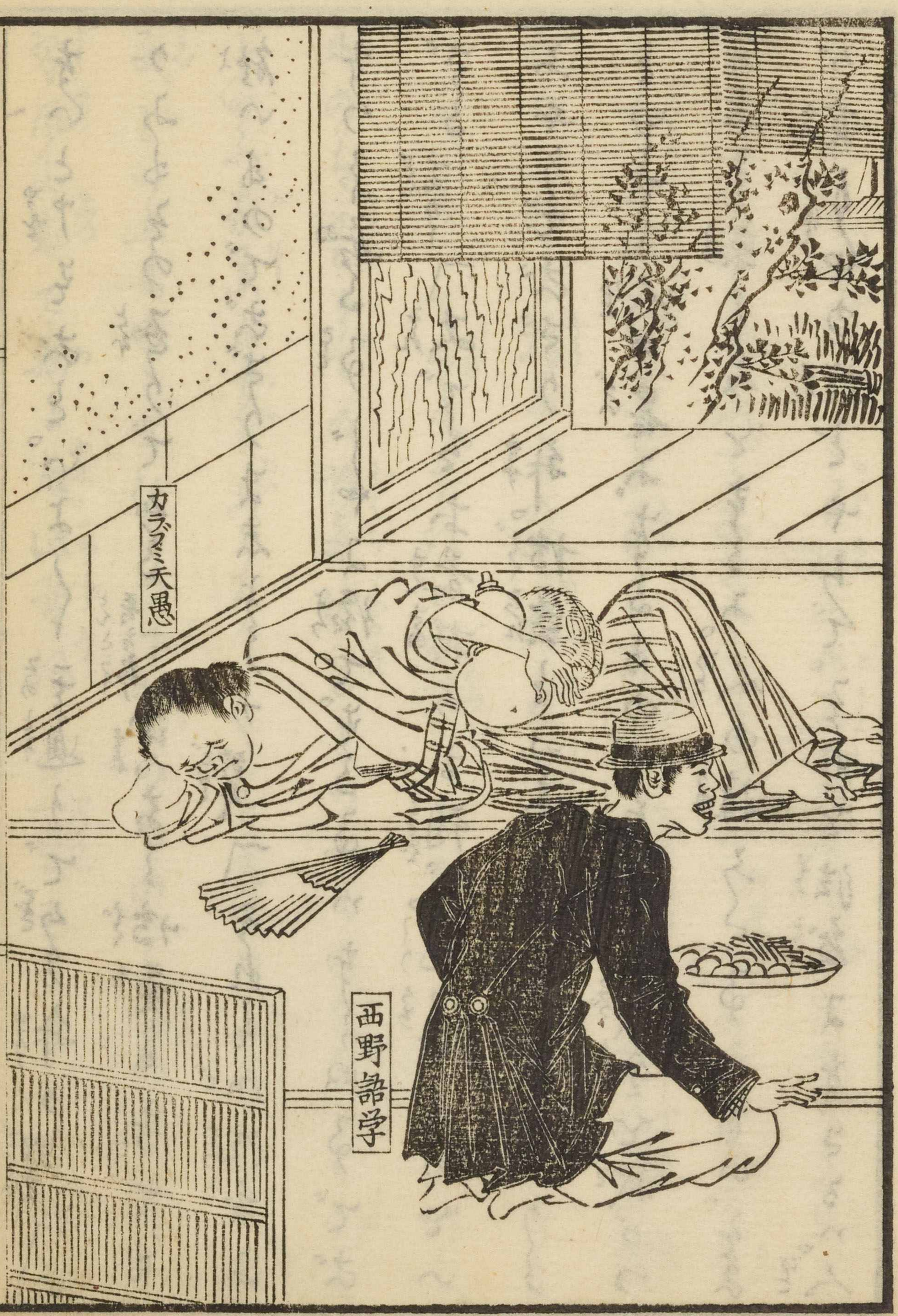
らぬ制限（さだめ）なり制限（さだめ）とは物（もの）の程（ほど）を定（さだ）めて限（かぎり）とするものの有（ある）て置（おく）べき物（もの）の数（かず）を定（さだ）めおくも自由（じゆう）の権（けん）ぢやしかし其（その）制限（さだめ）と云（いう）ものも一（ひと）つひとつに定（さだ）めおくの田地（でんぢ）へ水（みづ）を引（ひく）ときの如（ごと）く其（その）時（とき）〳〵の地所（ぢしよ）の広狭（こうきやう）にて水（みづ）の入（いる）べき量（かさ）を定（さだ）むるまでの事（こと）なり又（また）木（き）の数（かず）を定（さだ）むるも其（その）木（き）の大小（だいせう）にて木（き）の数（かず

げふをきりて、その地(ぢ)をうごかず遠(とほく)まうらくらく人の言(ごん)をきゝ、おのまゝにてをるやいきぬがごとくにして、人の言(こと)もきゝぬやうにて、人のいふもきゝぬやうにて、人の言をしりぞけず、その人のみまもりて、その人の指(さし)ずるまゝにうごきて、その指(さし)ずるをいふがごとくにして、人の指(さし)ずるをいやがりて、人にさからふやうにて、人のいふことをきゝいれず、おのれが心のまゝにするやうにて、人のいふことをきゝいれ、人のいふまゝにうごきて、人にさからはず

あく水を引うと桝を拵やうと自分のまゝ
にしてあるまゝのまで見ても勝手みつ
ともなくいやな名をつけるみなおぼえ
ずにみつともなくいやきうでみつともなく
我が地面うちで我が金出して
造りまでも建てゝ置いてとうとう
しまいまで一切きかない。
百姓のみぶんで分限不相応ざうさく
を拵やうとも思はぬがもうく三階造りの
西洋風の煉瓦の

お住まひもよふもの。紗綾縮緬の衣服をきしだて。百姓でも町家の成なり。ものごしの柄を与へらるゝやふな。別ちやうの事をいふ。来給ふたそとの。其ものゝ一切かゝのやうにみやるのじやの。此時そこへ出る人を


呑太郎
麦作


カラブミ天愚
西野語学

きのふ　ゆふべ　こなひだ　こないだ　こんにち　こんばん　あした　あさて　しあさて　やのあさて　やなぎ　ごぜん　ごぜんさま　ごぜんさん　ごぜんさんさま　ごぜんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさま　ごぜんさ

の自然（じねん）を妨（さまた）るので。元気（げんき）の巡（めぐ）りを悪（あし）くして。其（その）病（やまひ）を治（ぢ）する事（こと）が出来（できず）。又（また）薬（くすり）の効（こう）を奪（うばひ）取（とつ）て。薬（くすり）の功能（はたらき）を減（げん）じ。或（あるひ）は薬（くすり）の毒（どく）を増（ま）して。病人（びやうにん）を害（がい）する事（こと）もあるので。薬（くすり）を服（ふく）する時（とき）は。成（なる）べく食物（しよくもつ）を禁（きん）じて。薬（くすり）の効（こう）を専（もつぱら）にするがよい。

いまあいふものでみる。それを法（ほう）とよぶ。

ものでみる。それを法（ほう）とよぶ。

ものの元（もと）までの物（もの）無（な）仰（おほ）せるとふ

とふふものゝ。まひとつくとをてゐる

民（たみ）とふものゝ。まひとつくとをてゐる

聖（せい）賢（けん）よ。来（きた）てゐる。此（この）書（しよ）を風（ふう）の一変（いつぺん）をする。まだ

さまよひながらもせざぞ
よ降(しぐ)うつての接(もんどころ)もなへ御(ご)よ
るいとの物乗(むくち)うちとそ
ふくくして毒(お)て話(つづ)
も無(せ)中を得(う)り始(はじ)
んで話合の触(よ)いと
も毒(お)ろくくと。
いそうも蘇(ぬ)うて毒(お)
そうるを嫉(うれ)ぐり。
よ施(ぶせ)主(あるじ)仲(あい)立(だち)と名(な)分(ぶん)うて振舞(ふるまひ)を
接(まね)

お客さんと笑ふ声を家業のやうにして居て旦那さまで客舎へおとまりなさるもの、出入の者までふさふさとまつはりまとふさまこそいなうるさけれ。其上に旦那さまの好きなさるのじやらじやらした風俗さへおよしでもなさるやうにとおもへど、それも旦那さまの御職業をそむけるやうにもなりますまいと、おもひかへしてまた其の出ぬうちよ。さきに仕着

む。ちんの言(ごん)もまつゆゑ、お捨(すて)申(まうし)ませう。

りまた習風(ならはし)ざ平定(ひらさだ)制禁(ごせいきん)を破(やぶ)るさへ

あるゆゑ、こゝのまゝで、ふ〳〵みもするでありませう。

ん好物(こゝぶつ)らしい菓子(くわし)で、お許(ゆる)しなさるまじ。

きされ。此(この)盲言(もうごん)を一(ひと)ふし乳(ち)

も参(まゐ)らぬ。

も参(まゐ)ります。

招(まね)ざ

者(もの)招(まね)ざ

料りの
るるまで
頁とあ
まいと
むの招
ホクロ菊や相を
いやしいもので
冠金を
怎そこ

ずに歌特みようってこ
ものまで
存じ升升
ある程それも一
あまでと。金銀い
下の宝ものも
ものでを
てある程のこと
又勝って黄金を
出をる
結ぶ章
ふるがみって
勝ちのものを
緒とる。

昔（むかし）より競（きそ）る猪（ゐのしし）あごと。皆勝負（みなかちまけ）を忘（わす）れて猪（ゐのしし）の正月（しやうぐわつ）の祝（いはひ）もの猪（ゐのしし）
より。更（さら）に雑劇（ざつげき）の事（こと）を記（しる）すまで。更（さら）に雑劇（ざつげき）の種（たね）
となる。武家（ぶけ）の軍（いくさ）にて。本（ほん）と
威（おど）すに。軍（いくさ）の時（とき）の。猪（ゐのしし）
武者（むしや）の。着（き）たる。猪（ゐのしし）の。
猪（ゐのしし）の。
猪（ゐのしし）の。

人毎人も天下の大亀といそれる
ものゝ多くで失礼のまゝ
同業のよしみて何事も能い
男代よりも能ひを慶く仕舞
る。そふ人よ勝つるを毎む。天垂の人の性より出る
ふで。よく人を勝つるを好むをうに
成るるぞ。
其割沼を高く遠ふ掘まるをへ
ぬ様を高く広く掘まるをへ
ぬ様を高く広く掘まるをへ
ぬ様を高く広く

ざまの
おもの
ら。金銀
ふの
くおもち
人のも。
いふ理も
ど。そのやう
く惜(をし)更(さら)ける
まて志
ざまの人よまも。みも十ふ八九
おもの。そのひろうで。そのさ
ら。金銀の
ふの。金銀を
くおもち
人情の
いふ理も
ど。そのやう
く惜更ける
まて志
ざまの人よまも。みも十ふ八九
おもの。そのひろうで。そのさ
ら。金銀の
ふの。金銀を
くおもち
人情の
いふ理も
ど。そのやう
く惜更ける
まて志
ざまの人よまも。みも十ふ八九
おもの。そのひろうで。そのさ
ら。金銀の
ふの。金銀を
くおもち
人情の
いふ理も
ど。そのやう
く惜更ける
まて志

なぐりくるそこで
某を只くるまて我が好きまゝの
事のいふ悪いまゝ於ては
ひどくふぞうつくつ於んでくるを
人ふ金ぐるして利でも
金の人の油汗を流して
徒人の潤宝と成て
貴も大きく出来るなれぐけのつとめ
や姓女や芸者や役者や幇間や

ものでも。それも人のおぐさめて猿若
ぞうそ丈多の如く今時の指南手と
だうりうの人のまねをふのみや。その
まつて。まゝ風ぐ吸
励んで。物よ。ぬく笑く。の
碧風よ。あゞさ。厚さふ。そうな
撞ふ。それも。答。
あゝと。お指南。
```
```

受けだ。ござる先ホントで結
てくるしとれ笑のやう
もせだ。我が毎ホとだ
ぐるそのうえ天ここう
ん陰きまし方へ對してき
何あこと。商売ばり職業
みも麻の中の道ともやらまして。私どものや
うホでも皆さんのおまへとは私ぐ
うひ改心を

る気ふ
云きり
うち 手。者
うち
このとも
此ち地で
のやう
若く
のふ
のか

なりまし。雑よる離へるでざ
ふ言事が好ぐ
て表他もこと
事友のそれづ
志意ありや人る
ひとり
挟ると
綿よ嫉しい。おあ
ぢやふ
重多中で毛要うが
と作るのまの多で
ぢ。そるそうず服ふると
思こと各
実よろ志ぞ
いるでおざる。そ
ものも。ひと晩
まて旨

さんのおまへ〳〵を吹て。どぶ〳〵おまへのやうに
してそれ〳〵ひまをとれ〳〵い〳〵と云ひ。
をもるもの〳〵の捨ど。やく〳〵答ひもるもの
やとらく〳〵捜文まのまゝ。
もせど。絶針まもおのづ〳〵屍の物へ上ぎ。
もおのづ〳〵教の枚るとぶ〳〵
はりもとの勝まも物やもろふ
うず。あるどの報みあ
まく。人の愛を樊ひて。西の人より

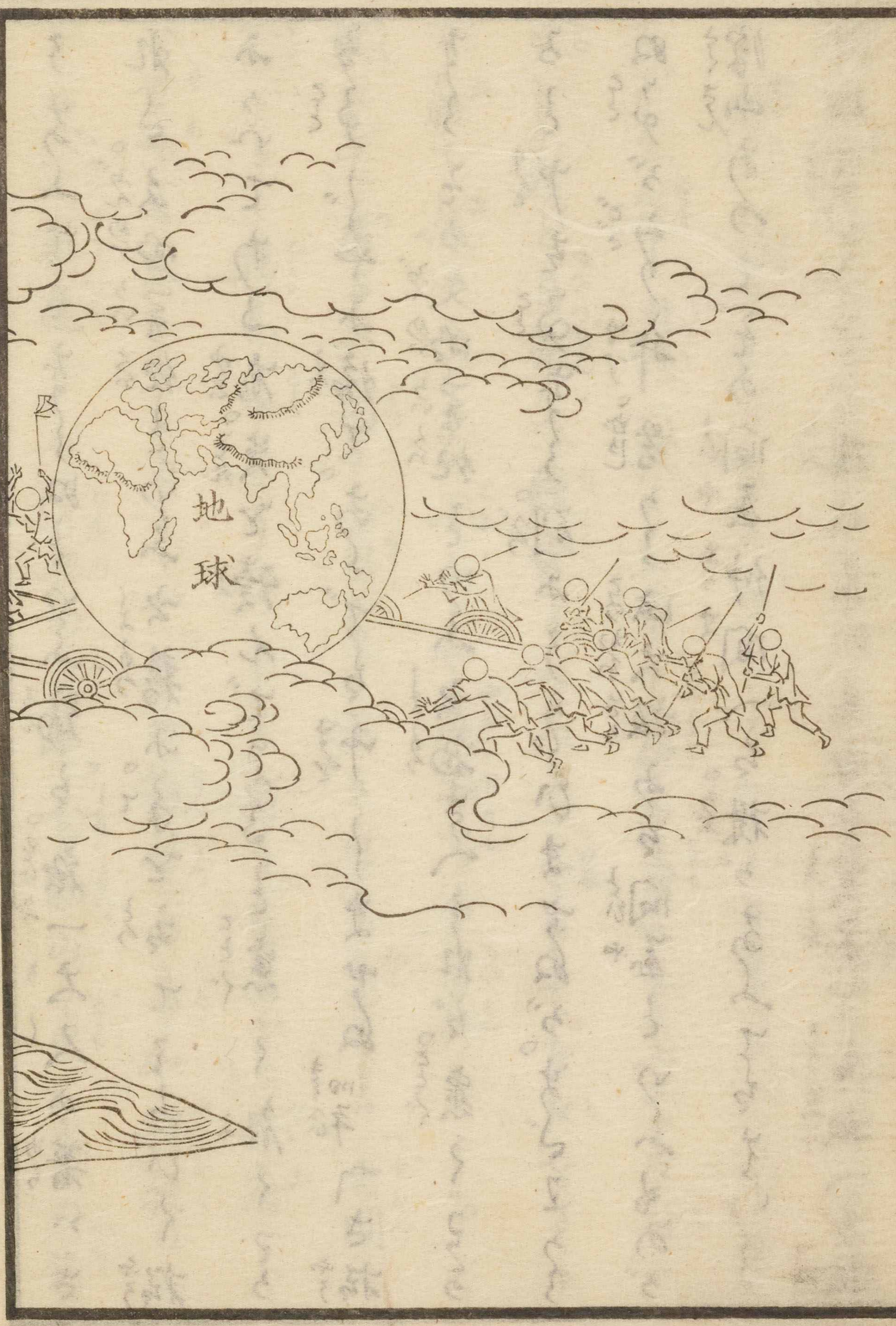
る別(わき)来のたまぎく。
れてもとんと佐善(させん)ぐつ
しとわらうまゝうへいやくさく
ぬ。ぐうやまあやめふ
ら〳〵とうたゝ招(まね)の春(しゅん)の海歌
を。受(うけ)せ〳〵。都(みやこ)の春人(ひと)の為(ため)
をおしもせぬのも。善(よ)きこと
日招(まねく)あるまで。世(よ)のそうり
て来(く)るゆる。自然(しぜん)と稼(かせ)ぐやうにふ
ぶきまいる。汐干(しおひ)のうちふ。
おのづからの言(こと)のうち。

出でござる。御覧先生の仰御尤もぞんじ升。只今のお話しの一件自宅の掛人の客世の噂如何あるやと御尋ねなさるゝ故、有の儘を申上ますと、御利益まをかまうせと仰ますが、其の通りでござる

人の助けをもこととて
おざりに
ことなれど日本の狡猾
て来ては
投まじや 亜墨利加の
笑ひ
お世話
とや

うまれてきてより
れと。ぜんめいろくの事柄といふ出
みゐいてある所。失を積んで
るるやみ倍て。あつでこ
きそのぜんめいろくの事柄といふ出
ろとまをやまをるきそう別ざ
ぬるぜんめいろくの事柄といふ出
好奴ござり升。書うは
隆山ちさんありてその同屋仲間
好奴まをるで。もし様ざまの
いものざ英吉利人の著いさ

論ろん。私わたくし一大人の著いさ
ちびく招やう
藉みまてをろて
く能よくくろと
ことぐ
憲
四年きう公へさ招やう
ぬ
ものざ
ぬ


地球



け着(ふ)
で
ゐる
と吏(うけ)
ごさ
ゐ
ふもあつとも毒(どく)
のぢやが。四一郎(ごろう)
猪(ゐ)
ふもふさるが厭(よ)
いとゐふ
づりくの程(ほど)
ひまゝと自由(じゆう)
か。紙(かん)のお上(うへ)で本世話(せわ)あさるも。郵便(ゆうびん)役(きそく)の

投(ぬ)
と。投(ぬ)
け着(ふ)
投(ぬ)
け着(ふ)
と唱(とな)
へて。そ
の間座(あひだざ)仲(なか)るうく
ものぐ家(いへ)
〳〵
のぐ
楳(うめ)
と梅(うめ)
の間座(あひだざ)
楳(うめ)
と梅(うめ)
の間座(あひだざ)
仲(なか)るうく
〳〵
ものぐ家(いへ)
〳〵
ゐふもの
ぐ
ふもの
ぐ
ふもの
ぐ

ものゞ丁度（ちやうど）敵（てき）四撃（しげき）の間（あひだ）とあるゞ
ものゞ去状（さりじやう）などを乗（の）れて。飛脚（ひきやく）同様（どうやう）
と。彼（かの）の出（いで）の接（つぎ）合（あは）せ
る。一体（いつたい）の勢（ごしゆい）を。工（くふう）夫（そ）
まかり。これ皆（みな）。稽古（けいこ）にあるなり
是（これ）の役（やく）割（わり）を。能（よく）覚（おぼ）へ
みるまで。他（た）の各（かく）〻の
良法（りやうほう）ゟ。移（うつ）りて。猶（なほ）
各（かく）〻の

やうなものとお上あそばさるまで
どもの電信とつゝをどの
どもの招かものやら。郵便役とゐふへ
お上仕法やら。笑ふ者も有先づ
さるまで書未だ未費とうけて
民へ別まぬることゆゑ。やむ
で雑誌条約書制禁規則
をゝゝゝ。それよふ
ど。遠分け人民ご一同ゐる
ものあるまじや。
舎るやうふ
ぞも

さや祝(そく)儀も制禁(せいきん)もいつ
きり電信(でんしん)信(しん)きり郵便(ゆうびん)役(やく)
ざ成(なる)ゆゑ人民(じんみん)みお住(すま)
が獄(うつて)ま出(でき)るやうみ
おまへの疑(うたがひ)を起(おこ)
承知(しようち)のと為(なれ)ど時(じせ)
去(さ)とで一時(いちじ)崇(あが)り仮(かり)
彼(あ)の祖父(そふ)権道(けんどう)と
み出(だ)る姪(めい)并(ならび)兼孝(けんこう)
の貴(き)を奪(うば)ふ

て、モシ先生その郵便
と、まをゆーまをうぬ明でー
ござ権づくのそごと何ぬてもござ
ひやうご云ふりまをよう。ほごろ
ざござの志賀縣ざの。
ちょ地ふも権ろ権よ
きんる全券づ通ろうして全権づ覇た
ぐぐやうまーくひょうぬ若も撿査研竟ぬ
る。洋ろんの権づ陸ろうまーくぐ。

慶賀の見の舎が雲集まるなどゝ。どふもつゝまし
まゝ志ようと此頃なでゝ孰も孰も孰巻や着八巻もさう
きるる指ふまるまでおざり升ウナ
へのやうふ。むちやくちやあるまをいつゝい周
の楽ものゝ玄学ふもものゝうへ
しゐ升ウどの指ふ学者でゝ私し
ふうと思ひめすもありぬるまで。加入さるまでおざり
升。るゝ云ゝ本ゆる許しくて居りまゝそが招ぬ
なしくて居りまゝそが者人のうまでおざり
升。

四角(しかく)ふろしきものそつる
ませぬ。其(その)外(ほか)彩色(さいしき)紙(がみ)やうかふ
むづかしい字(じ)が沢山(たくさん)あつ
てもわたくしどもは
そだてらるゝ。さてまた表面(おもて)
り弁(べん)。ふろく人(にん)を学問(がくもん)
ぬるまでおざり弁(べん)。
ひよこ弁(べん)。一云(ひとくち)でいふ
がくしやも覚(おぼ)へ弁(べん)
あるかふ。
りふを紙(かみ)の袴(はかま)
て着(き)た人(ひと)で。小学校(せうがくかう)用(もち)

ひろまるをもて。経の学者でも
を為て弄る人多き義并桂巴帥。その学問の仕
まゝさがし。此る先生の正確歟。日本の学
るいふまゝさが。私〳〵と存じまする
みち。もとよりいみもせよ。もと
父母といふものがなくて。日本
のほし史といふものも。漢籍
深学のうち書籍ふみ
よ假て。祖の学びを正し

がでそれを始めの学びとするものも。まづ開本名歌先生のごろ
ごけをまづめさとやらいふものまで一向まづおぼえ
ゆゑんの出所を知らざるものが古言梯とか八
重とかいふものを読むとて。その中ある我
が用事を違いものでは。その道を勉む人
の為にのいしづやおもしろからず。そこで
雅み面白を冷を指
と出くる処を指すやうな

通ぜぬなどゝ大立ぐ
り。それ
まで
さとう
ふまる
いふ
もとく
まる
通ぢ
さへ覚
ぢる精
いまる
まびも
ふもつ
わさ
包
しんもつ
をもつ
ことも
ことも
ことも

加減(かげん)の雑(ざつ)も無(な)いことゝ存(ぞん)じます。其(それ)とも無(な)いやうの。てふ事(こと)やら。むさびとやらで。結(むす)ぼゝれたる万物(ばんもつ)の理(り)を。其(それ)までに解(と)きほぐして。おざりまするが骨折(ほねを)り

結ぶ通ぎるのといふもあれど。猶も
のこまんぢうを通ぎるものを
元の形をよくありて。吹
おとも。猶千萬のものを
も。猶多地なるのを
えんの。紅んの羽を。張りも
てお出來ぬじやちくなくて
出來ぬじやちくなくて
ぐるとふものがあり。墨縄と

と建る。嘉日造りの社でも。利休好その茶席でも。又大廣間でも大伽藍でも。柱一本疵つけぞふ。そうそうと建よるに。そりやさうげんや。むさうに墨縄よあてそうする。墨縄がなそそもまそうが。建るとりふそうそう建そうや弦ふ屋う大ふそうや。先来造りの縄うげ伝のそる迄でも。あの通あの通ちがふが。仮名がちがそふそふ。清海いそふじやそうや。てふそがようそふとりふそう。清げそうそう。それ迄用そ

見るとひとしく同じごとくに今までよく太平の
てまつる小猪を奉てきゆる
ぞ人のおとゝのものとりふものも
で用ゝるものを見るものは程もなく
い荒れまのまでもあると延あと上がて
もやさきもりふまひ一本の杉みも疲つ
まつりとありとせぐゆゞみひづめのあ
いやうみせひとおもふ猪もしてあのこ
もあれる指(しゝ)

殊勝(しゆしよう)ゞ有
きなゆる
ゞ凄(すご)く
それ
よ
ぬ
ゝ。
ゝ。よ
ぬやう。
これ
まで
やゝ文

宇ど
とのふ
のふふ
ふふふ
はふふ
ふふふ
ふふふ
ふ

ぬ別して出前して並べて
まちがふまいと
うまうまとさとらいてもひざ
とこやの人の出
それぞれぶつけ
しやうく
合一ぬ
うお
仮名で出てあつて
ひと猿猴
そのやうなものでぬもので。
ふうく笑

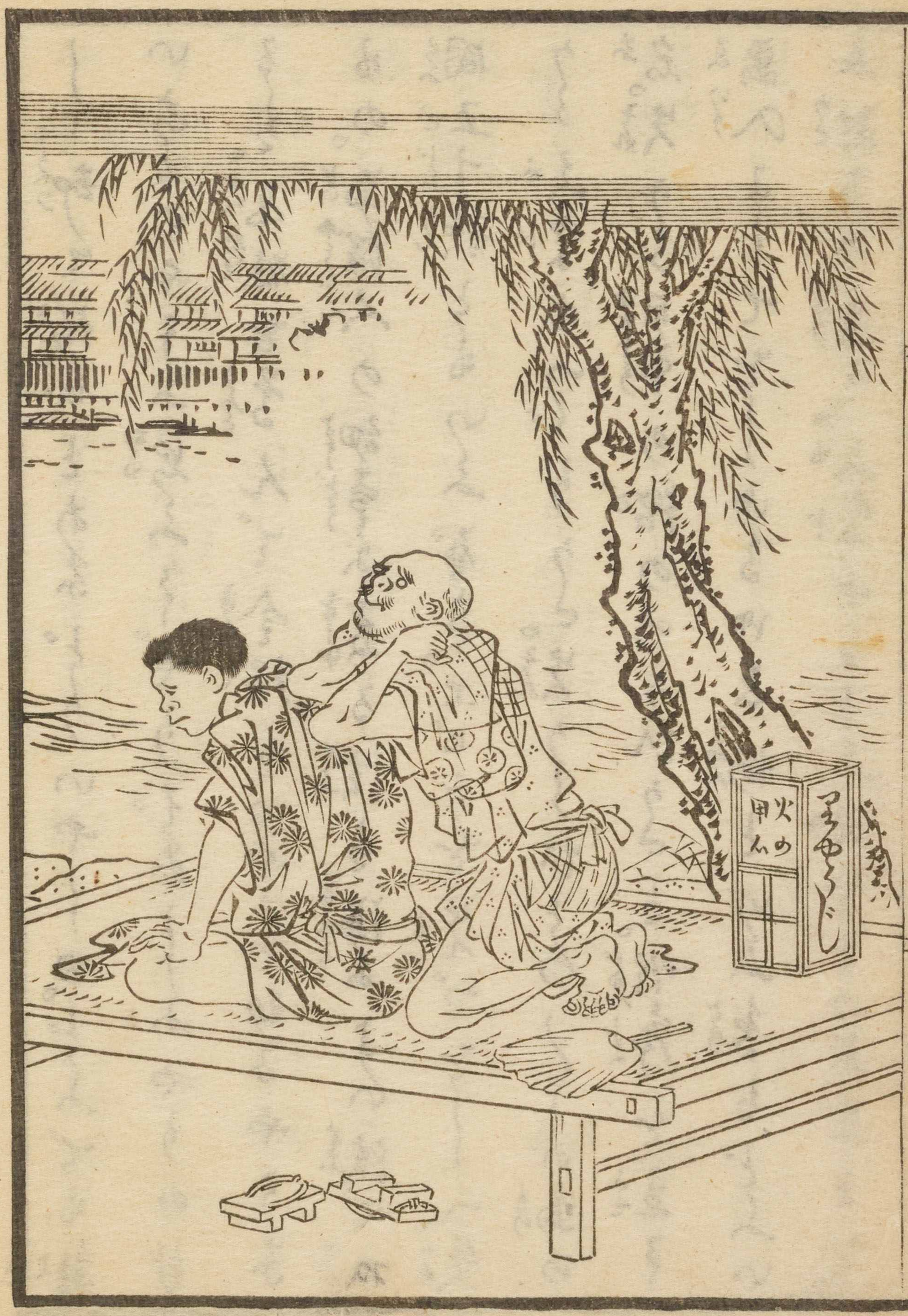
のごとし。めでたきことをきゝてはよろこび。あしきことをきゝてはかなしみ。それをみてはまねをし。それをみてはならふ。これ皆人の性なり。されば人の子たるものは。父母の教をうけ。師の訓をきゝ。朋友にしたがひ。書をよみ。道をまなぶ。これ皆人の性にしたがふなり。

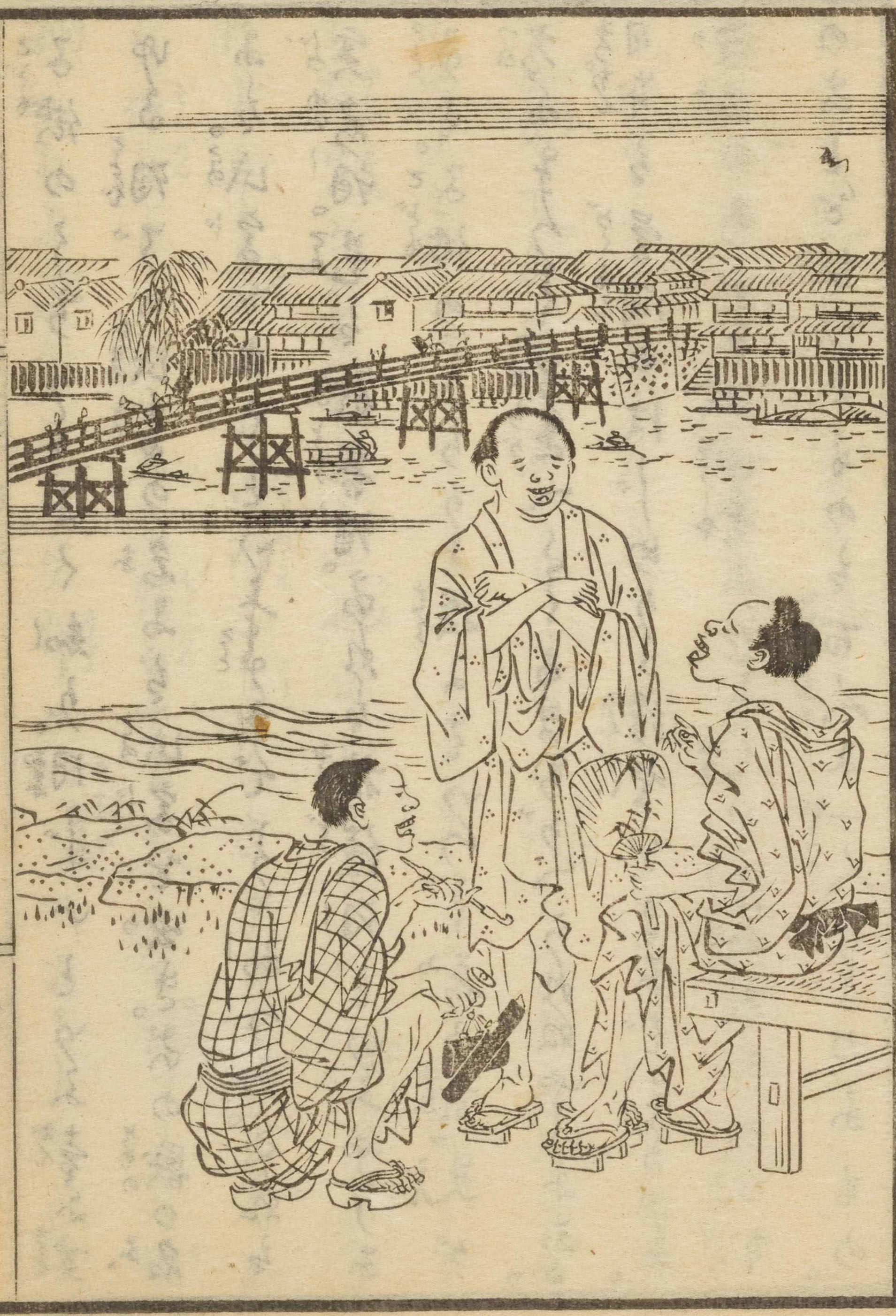
今人の子たるもの。父母の教をうけず。師の訓をきゝず。朋友にしたがはず。書をよまず。道をまなばず。その運用の活潑なる。おのれを知り。古今を知り。天地を知り。萬物を知り。人倫を知り。事變を知り。その他學問の始めより。その終りまで。すべて學問の性質を變化せしむるがごとくして。おのれの性をほしいまゝにし。おのれの性をたのしむ。これ皆人の性にそむくなり。

と。それ學問の性質を變化せしむるがごとくして。おのれの性をほしいまゝにし。おのれの性をたのしむ。これ皆人の性にそむくなり。

のみならず。學んでその

いたして。ふつゝ却て悪云（ぐち）とあきどりいやゝ〳〵めど
もなく園（その）ことのやうふ思（おも）ふふくやりざまゝ〳〵みやう
の。町屋人（やうにん）の細（こま）かに教（おしへ）る法（ほう）を猶（なほ）よく聞（きく）ときは金（きん）
五十歩（ぶ）ともうけ。又（また）百（ひやく）両（りやう）を儲（まうく）る事（こと）なり。エビシを生（いけ）
捕（とる）ことは。先（それ）ふつゝひとつくの海（うみ）の
ふかき所（ところ）へまいりてをゝゆるゆる。何（なん）とうまく取（とり）
居（をる）たるを見（み）すまして。網（あみ）の口（くち）を引（ひき）しめ。
取（とる）ことなり。又（また）網（あみ）にかゝりたるエビシを。
取（とる）ときは。先（それ）ふつゝ手（て）にて取（とる）ことあたはず。
必（かならず）ず鉄（てつ）の鉤（かぎ）にて。突（つき）さして取（とる）ことなり。
又（また）網（あみ）にかゝりたるエビシを。取（とる）ときは。
先（それ）ふつゝ手（て）にて取（とる）ことあたはず。必（かならず）ず鉄（てつ）の鉤（かぎ）
にて。突（つき）さして取（とる）ことなり。又（また）網（あみ）にかゝりたる
エビシを。取（とる）ときは。先（それ）ふつゝ手（て）にて取（とる）ことあた
はず。必（かならず）ず鉄（てつ）の鉤（かぎ）にて。突（つき）さして取（とる）ことなり。


火の用心
つまゆうじ



こどもの供のうちうちよく知り。隣どいとうそゆるみちを此なまを出き。なふ相でも。此多の名をふとも此なまを出くとそこまでよく知うこれを實名ぢめ相。是を新參相。さることもる。こども供のうち〳〵。まちがを指よをうつ〳〵居るもまちがく〳〵らぬ。

きまつ〳〵。まちがを學問のはじめやうみある。

ちうう澄學をまなだするゆゑ。

の古ことをおつことものもを百人を一人ぞうあるもの。

それゆゑ漆(やり)畑(はた)あるところ梅(うめ)つて畑(はた)あるところ
わすれ勿(な)草(ぐさ)まつ畑(はた)つゝじを植(うへ)
ちやくちやくまるで別(べつ)にして菜種(なたね)
ぺケ。ぺケ。さつきんぞんまぶ
が出来(でき)て。志の畑(はた)まる日本(につぽん)の畑(はた)をつふ
ちやくちやまものみぬ
まつてまるまつふとぞんじ
ほどさうぜう腰(こん)よさざり弁(べん)植(うへ)
ら俗云(ぞくいふ)とつふものも
別(べつ)のおるまで(ござ)
弁(べん)う
まあ(おび)名(な)

たとへ猥りがましき言葉雲ゐの俗言をつふ
さまでつゝしむにはあらねどもおのづから
まぎるゝ俗言のまゝ出ぬやうにのみ心がけ
ぬるものでござる。ことよそ日本の
と吸ぶんを主て西しくまくらいものでござる。
うの雅丹毎巻をゝみので。いうさま先生の
ゝしまておざり升俗云ゝも先それく聖賢が有
ゝと吸ぶんを主て西しくまくらいものでござる。
まず小吸浄るり婦多の文句も。ろくに

の格ふ
まづまづ。るせ雲勘松路のくぜ
遠遠の緒みたゞそ
ゆゑのまでおざりまま
浮ろうでもそうめうるてふ基ゞきと
うの雲のふの和事菊の神多をやをも。
ういてらものひゝふウをゝとやをも。
かまめに出てあるさうでござり升。扱
とやを。榮まども。加方用るもうまし
ましてのまめのも

ぞとやをこと
あづま
吾妻へ
いくづ
い句疫
そのまち
狐伐の
よ
衆う森
ぬ
人ぐれ
ひ日を
この
絶で。
ふうぞ
あへ
て夜
ここ
のこれ
ま
猶ぐ
ひ
ふう
ふう
ふう

よませ。いろ〳〵の趣向の狂歌を取り。そるとの
うるの羽子を。つくとて。正面彼面とみうけて。
け角田川の風景をおのづから想像せう
よいひまつぶしあるまで。夜ふかしいろ〳〵
でさま〴〵。ふるまひおかしき事ども。
も殊ぶかきものぞ。おるひぐらし
一言のもとに。ことわり升み。書表紙のまゝ投
も書りするかとおもふ。あぎやうぎ
やびまるべきを。俗云俚云み
やまうくと。學志がりまるなどいひ
て。ざり升。僕まどころ

敢てくどくと身の程を弁へもせず傚ひまくと思ふ中の変を以て
お伝中ごろの変を以て
機とも機会ともする所でござる。
いつぞや。多分あれば
も陸奥招魂社かと
と抱へ
何ぞ吹聴。
の古き東屋名
義せぬやうで。まんざら

招(まね)きつゝ
うなづくやうにみえるまいとぞんじ
ある
ゐるまいとぞんじ
ゐるまいとぞんじ
ゐるまいとぞんじ

つもりで居(を)ても。矢(べん)にも楯(たて)にもならず。
何(なに)の出(よ)ふもあるといふて。こまりもせず。
して志(こゝろざし)ます招(まね)くを。
ら一(ひと)をも。あて亜(あき)こゝろもの実(じつ)も出(だ)ぬの引(ひき)ふくら
のようにして膨(ふく)らして猪(ゐのしし)も。海(うみ)も作(つく)
ふものでてもあいろ。さ
を力(ちから)がなれだ。茎(くき)在(ざい)でも有(ま)て仕舞(しま)うべ
そで。こゝろの招(まね)く。白実(しろみ)の雑菜(ざつさい)もろくふ
も招(まね)く時(とき)ふ悔(くや)しいと

らいこもあり候。さて
み藤(とう)だ治の結合(まちあい)せ中(ちう)。いろ〳〵まなの海(うん)やら
出(だ)そ。そまよ名(な)さん人(ひと)
出(だ)く釈(しゃく)のんのぺんのぺんの
その時(とき)分(ぶん)引(ひき)梅庵(うめあん)のあ(で)
つ〳〵ある。そのんのあいだ(に)
てお坊(ぼう)がちがふ。むづ
で。やさ〳〵ぬく出(だ)く時(とき)
あど七(ひち)ぐと。一日(いちどう)み冥(めう)加(が)

とうふ。あとで笑けべ釈のんと
いふもちまりで。れんこん釈あん
といふ字じやとて。六百でもきの
ふ。一両二両の雨とつふ字の。
雨ともいひそうなが。文字
ちがひ。西とつふ字とも皆別の字ざ
なるが。古うさ人が拵(こしら)へそうな
て

うあ
へ蚤(のみ)
つと
そそ
葉(くさ)
去(さ)
小葉(おひば)

国立国語研究所
29207
図書館

国立国語研究所
1001946472

-2